

ワン！ぱくっ子サマースクール参加者のその後について

—学生向け短期リハに参加した2事例—

○笹山夕美絵（公益財団法人 日本盲導犬協会）
 内田まり子（公益財団法人 日本盲導犬協会）
 原田 敦史（公益財団法人 日本盲導犬協会）

1. はじめに

（公財）日本盲導犬協会では、小学生対象、中高生対象、成人対象の視覚障がい者へのリハビリテーションプログラムを実施している。小学生対象のプログラムは、ワンぱくっ子サマースクール、中高生対象のプログラムは学生向け短期リハビリテーションがあり、ワンぱくっ子サマースクールから学生向け短期リハビリテーションへ参加した人数は5名で、その割合は26%であった。

今回は、小学生から中学生にかけて継続的にプログラムを利用した2事例について報告し、考察をする。

2. 事業について

（1）ワン！ぱくっ子サマースクール （以下 サマースクール）

○対象

視覚障がいのある小学生とその家族

○期間

基本的に夏休み期間中の3泊4日

○目的

- ・さまざまな体験を通して自分の可能性を再発見すること。
- ・多くの人と交流を図り、ともに楽しむこと。
- ・家族に子どもを客観的に見てもらい、情報交換の機会を持つこと。

○実施概要

買い物体験や調理体験等、日常生活でも体験することを実施する。加えて日常生活では体験することが難しいことを組み合わせている。買

い物や調理体験は日常でも体験すること、日常生活では体験することが難しいものでは、今年度であればカヌー体験などを行った。

また、親子が別になるようグループ分けをして他の子供の様子を見てもらい、家族から離れた場面での子供を客観的に見てもらえる場を提供している。子供が就寝後に、保護者向けのプログラムとして視覚障がい体験、その日の反省会として意見交換会の場を設けた。全体を通して、生活訓練に繋がるような体験を織り交ぜつつ飽きない様なプログラムを組み立ててを心にかけている。

○現在までの参加者

昨年度から、島根、富士宮でも実施しており、現在までに視覚に障がいのある子どもとその家族の参加のべ人数は3センター合わせて、246名となった。内、仙台訓練センターに参加した障がい児はのべ人数58名であった。

（2）学生向け短期リハビリテーション （以下 短期リハ）

○対象

中学生、高校生

○期間

夏休み期間中の1週間

○目的

- ・日常生活をスムーズに送るための訓練の実施および有用な情報の提供を行なう。
- ・多くの同年代と交流を図り、情報交換の機会を持つこと。
- ・卒業後の自立と社会参加の促進を図ること。

○実施内容

本人のみが入所して行う生活訓練で、白杖

歩行（以下歩行）、日常生活動作（以下ADL）、パソコン（以下PC）、点字、ロービジョンといった訓練のほか、盲導犬の歩行体験なども行う。

○現在までの参加者

2006年から実施して現在までに計5回実施し、のべ人数は35名であった。

3. ケース概要

(1) Aさん（男子）

○障害名 先天性無眼球 全盲

○家族構成 両親、姉2人

○学校 盲学校に通学

○参加状況

2003年（2年生）～2007年（6年生）でサマースクールに計5回参加

○短期リハ受講

2008年（中学1年） 2010年（中学3年）

○受講訓練科目

中学1年 歩行 ADL

中学3年 歩行 ADL PC

受講内容は、以下になる。

○歩行訓練

中学1年生時に白杖操作、バス・電車乗降、目的地歩行を行い、中学3年生時にバス・電車乗降の復習、目的地歩行（地図的操作）を実施した。

1年生の時は目的地歩行の地図的操作が苦手だったが、3年生のときはルートを点字で書いてもらい整理しながら実施すると、よくかけており、イメージもできていたので、これからも練習を積み重ねればできるようになることが判った。

○ADL訓練

中学1年時に掃除、洗濯、簡単な調理（包丁操作）を行い、中学3年生時に洗濯、タオルのたたみ方、掃除を実施した。

今回は洗濯の流れからタオルのたたみ方を中心に実施しタオルはたためるようになった。

○PC訓練

中学3年生時のみに行い辞書検索等を実施した。

辞書検索を通してソフトの利用方法などを知

ることができ、実行できた。

○訓練結果と評価

中学1年生、中学3年生の時に参加。短期リハに参加するまで、一人で家を離れたことがなく、ほぼ単独歩行の経験もなかった。

中学1年生のときは、身の回りの事を自分で行うこと、白杖歩行での単独歩行も体験のみだったが、一人での生活に何が必要かを理解してもらうことを中心に実施し、それを実感してもらうことが出来た。

中学3年生の時には本人から単独歩行の目的地やADLでも洗濯のたたみ方や干すのが苦手だから行いたいと目的が具体的に明確になり、的を絞って実施できた。

全体を通して出来ないのではなく、経験がないために出来なかったことに気づくことができた。各回とも、修了後本人と家族に出来ることと、出来ないこと、今後の課題などのフィードバックを行った。

(2) Bさん（女子）

○障害名 未熟児網膜症 光覚

○家族構成 両親 兄 祖母

○学校 盲学校に通学

○参加状況

2005年（3年生）～2007年（6年生）サマースクールに計3回参加

○短期リハ受講 2008年（中学1年）

○受講訓練科目 歩行 ADL

受講内容は以下になる。

○歩行訓練

白杖操作、バス・電車乗降、目的地歩行を実施した。

歩行では、まずは慣れることからで、センターにいる間の移動時には白杖を持ってもらった。また、バス、電車についても単独で乗ったことが無く、白杖で確認してもなかなかその先に足を出すことが出来なかった。後半には、少しずつ白杖を振って確認することが出来るようになっていた。

○ADL訓練

掃除、洗濯、簡単な調理（包丁操作）を実施した。

今までやったことの無い動作が多く、今回の

みでは時間が足りず体験のみになった。が、どんなことが必要なのかは実感できていた。(今までどんなことが必要なのかイメージ出来ていなかった)

○訓練結果と評価

中学1年生時のみの参加。

初めて一人で自宅を離れるので、身の回りのことを自分で行うことを中心に訓練を行った。将来に向けてどんなことが必要か、体験しながら理解してもらった。

経験が足りず出来ないことも多かったが、出来ることもあったので、出来ること出来ないことの整理をして、修了後、本人と家族に自宅でも出来ること、習慣の中で経験を積ませることなどのフィードバックを行った。



写真3：短期リハ実施中の様子



写真1：サマースクール実施中の様子

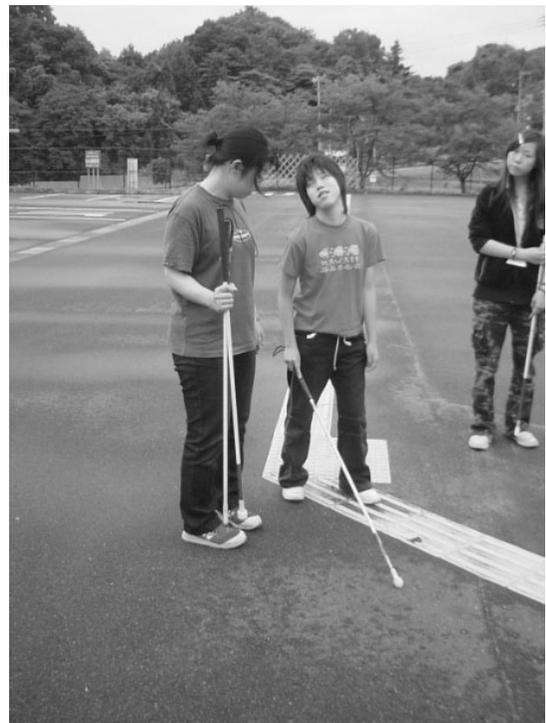


写真4：短期リハ実施中の様子



写真2：サマースクール実施中の様子

4. 結果と考察

(1) 短期リハでの訓練課題

Aさん、Bさんともに課題は日常生活に関わることが多かった。課題を実施するとスムーズにできることも多かった。経験をしていないために、できないことが多いということがわかった。

(2) サマースクールでの家族へのフィードバックの効果

サマースクールの時には、家庭での関わり方を考えるきっかけにしてもらうようにフィードバックをする時間を設けている。“親としてどこまで手を出せばいいのかが、回を重ねるに従って毎回気づかされる”という発言も多く聞かれたが、短期リハでの様子を見る限り、日常生活場面で経験が不足している場合も多く、サマースクールでのフィードバックが十分に生かされていない現実があった。

(3) 短期リハのフィードバックの効果

Aさんは、2回目の参加時でも、日常の経験が足りなくて出来ないこと（洗濯の干し方や衣類タオルのたたみ方など）があった。家族がどのように対応した方がいいのか分からない、時間がない等様々な理由が想像できるが、1回目の終了時、本人・家族へのフィードバックが十分にできていなかったことが見えてきた。

(4) 職員側の視点

各個人の問題点はサマースクールの時点で見つけられていた部分もあるが、短期リハに参加してもらうことで改めて判ることの方が多かった。フィードバックにおいて本人や親との関わりが不十分であり、職員が意図した説明がうまく伝わっておらず、もう少し方法があったのではと、今後の進め方について検討しなおす必要性を感じさせられた。

サマースクールでは集団行動の中での動きなので、具体的な生活場面で何が足りていないか

の協議が職員側で不足していた。しかし、短期リハに参加することにより、具体的な課題が見えてくると再認識した。

課題のフィードバックについては様々問題点が浮かび上がってきたが、今回の事例を通して、継続的にリハサービスを受けることにより、本人自身の課題が明確になり、具体化され、さらに次のステップへ繋がっていくということが実感できた。

特に途切れてしまいがちな障がい児から障がい者への支援が、サマースクールから短期リハ、さらに在宅訓練等という形で連続的に訓練が提供できたことは、そのことが親に対して安心感を与えることに繋がっているように思う。成長に合わせて継続的に実施するリハサービスの必要性は高いと思える。

5. 最後に

あらためて考えてみると、当協会が行っている事業について、まだ未熟で反省させられる点が多いことに気づかされた。一方で、児童が少なくなっている盲学校、地域の特別支援教室に通う生徒は、同年代の当事者との交流の場が少ないことは容易に想像でき、障害児を抱え孤立感を深めている家族がいることも事実である。

彼らが、地域で安心して生活ができるような環境を作るための場を提供し続けることは、当協会の使命だと考えている。

今後も情報を発信しつつ、地域の盲学校などの他施設との連携も図っていきたい。